



言語コミュニケーションに関する授業での各種ツールの利用例

情報学部 岡野 雅 雄

情報学部で「記号論」、「コミュニケーション論基礎」、「言語コミュニケーション論」などを担当しています。情報学研究科では、「コンテンツ評価特論」で、情報コンテンツに対する生活者の印象評価の分析法も教えています。自分が学部学生的时候には、筑波大で心理学を、次いで大学院言語・文化研究科で言語心理学を学び、その後、情報コミュニケーション系の学科で二十余年教えてきました。

(おかの まさお)

言語コミュニケーションに関する科目を担当する中で、悪戦苦闘しつつ自分なりに工夫していることを報告します。具体的には、大教室授業でパワーポイントを用いるスタイルのメリットとデメリット、e-ラーニングの利用、自分の科目で役立っている言語資料・ソフトウェア等について、述べてゆきたいと思います。

1. 抽象のハシゴ

ある学会主催の市民公開講演を聴く機会があった。私の前には誘い合わせて参加されたらしい市民の方々が着席されていた。始めのうちは講演の内容にうなずいたり、配布資料にメモを書き入れたりされていたが、一時間ほどしたら、ほとんどの方が筆記具をおいてしまっていた。配布資料も閉じて、目をつぶってしまった方もいた。

他人事ではない。自分の授業でも、学生が「もうだめだ、ついてゆけない」と思って鉛筆をおいてしまうときがないだろうか、と自戒している。

そこで、ひとつ工夫したことは、抽象論が続きそうになったら、必ず具体例を入れることである。たとえば、ある理論を紹介するときには、概要を示した後、事例や、視覚的な例をいくつか出しておいて、またそれを括っ

て一般化するようにと、流れを考えている。一般意味論学者のS.I.ハヤカワの言葉を援用すれば、「抽象のハシゴ」を昇り降りする形が理想である。授業の流れというだけではなく、受講生にも、具象と抽象を行き来できるような思考を求めている。

2. パワーポイントのメリットとデメリット

具体例を示すのに、パワーポイントは向いていると思う。あるとき、大量の資料をパワーポイントに入れておいて、そこから素材を引き出しながら学会講演された方がおられたのを見て便利だと思い、自分の講義は全面的にパワーポイント使用の形に移行した。

実際に試してみて感じたメリットは、カラーの画像や動画を提示しやすいことである。たとえば、担当している科目「記号論」では、デジカメで街中の記号、すなわち交通信号、

標識、広告などを撮っておいて、例として使っている。また、各種メディアの中で、「記号」としておもしろいものは、記録しておいて、授業の素材にしている。

一方、パワーポイントは、理論を細かく説明するためにはあまり向いていないのではないと思う。パワーポイントは、効率的に時間を使って「プレゼンテーション」するのに向いているツールである。もちろん、自由度の高いツールなので、プレゼンテーション用のひな形にそって作らなくてもよいのだが、その形に流れてしまいやすい。

3. e-ラーニングの試み

今から10年ほど前に、e-ラーニング用の「文章演習」の教材を作成した。書く技能を構成する要素のうち「ルール化できるもの」を明確化して、書くことを、だれにでもできる言語技術として学習できるようにすることを目指した。このような言語技術としてのルールの洗い出しには、テクニカル・ライティングからのアプローチ（岡野, 1998, 2001）を用いた。この教材の構成は、ビデオクリップでの解説、スライドと音声による説明、クイズ、單元ごとのまとめ、知識確認の問題からなっている。

クイズ形式は、選択肢からの正答選択、穴埋めと、単純であるが、自動採点ができるため、即座に結果をフィードバックできる。合格点に達するまで、再チャレンジをしてもらうことで、単純な知識の復習、それによる知識の定着をはかっている。学生は、大学の授業の空き時間を使ったり、自宅からアクセスしたりして自由に学習できるし、学習記録はログに残るので、教員からも進捗状況がよくわかって、利便性が高い。

他方、単純なルール化が難しい部分は、教室での演習に回した。教室では、対面授業が絶対必要な部分に集中できて、時間を有効に使った授業ができたと思っている。

4. 言語に関するコンテンツ、プログラムなどの紹介

ここで、言語にかかわる担当科目で利用しているコンテンツを、いくつか紹介したい。

まず、国立国語研究所が作成した「ことば

ビデオ」(全5巻)である。いずれの巻も優れた内容で、わかりやすく、しかも、言語学の研究成果をさりげなく取り入れている。もともとはVHSビデオで販売していたが、今は、YouTubeで公開されている（以下からアクセスできる。https://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/kotoba_video/）。

また、音声の分析については、Praatというソフトウェアが有用である。音声の特徴の視覚化（スペクトログラム、フォルマント、ピッチなど）ができるほか、音声合成も可能である。<http://www.fon.hum.uva.nl/praat/>からダウンロードできるので、学生に使うことを推奨している。また、Chrome Music Labは、特別な設定がいらず、Webブラウザから利用可能なので、誰にでもおすすめできる。SPECTROGRAMというセクションでは、自分の話している声が即時に声紋の形で表示されてゆくので、学生へのデモンストレーションに好適である。

その他、国立国語研究所が開発した「日本語話し言葉コーパス」ほかの各種コーパスや、自然言語処理技術として開発されたChasenやMecab等のプログラムも、授業で使わせていただいている。これらについては、Web上に関連情報がたくさんあるので、ここでは名前を挙げるだけに留めたい。

文献

岡野雅雄(2001)「文章表現教育の情報化」, 文教大学付属教育研究所紀要, 第10号.

岡野雅雄・君島浩・河村一樹(1998)『テクニカルライティング情報系の文書技術』, 専門教育出版.